

「学習集団をエンパワーする」 —— 高まり・広まり・深まりをつくる ——

中嶋 洋一

1. 紀太富士雄氏遺稿集『若木』との 出逢い

7年前のことである。

私は、東京新英語教育研究会の阿原成光氏（現副会長）の家におじゃましていた。酒を酌み交わし、自己表現や英語を好きにするにはどうしたらよいかという話で盛り上がっていた。話が集団をどう育てるかということに移った時であった。

阿原氏は、「そうだ、中嶋さんに見せたいものがある」と言ってふっと席を立たれ、二階に上がって行かれた。

戻ってこられた時、手には緑色の冊子を持っておられた。赤茶けて古くなった表紙には『若木 —— 紀太富士雄遺稿集』と書かれてあった。

「よかったら読んでくれないか。そして紀太君の遺志を継いでくれないか」

先ほどまで、冗談を連発しておられた阿原氏が、ハッとすると真剣な顔になっていた。

次の日、阿原氏の家を後にした私は、早速帰りの新幹線の車中で「若木」を取り出した。

気になって仕方がなかったのである。

紀太富士雄氏は、当時新英語教育研究会（以下新英研）の機関誌であった『新英語教育』の編集長であり、学習集団づくりにおいてはリーダー的な存在であった。新英研の屋台骨を支える実践家であり、理論家でもあった。

惜しくも、30代にして病に倒れ、帰らぬ人となった。追悼集に寄せられた多くのことばから、氏がいかに新英研にとって大きな存在であったかを伺い知ることができた。

『新英語教育』52号に載せられた、氏の「学習

集団づくりのための班学習」(70年7月)の原稿は、初めて読む私を圧倒した。これほどまでにすぐれた理論を、私は今まで読んだことがなかった。

次の日から、私のペア学習は大きく変わった。

2. 班学習が形骸化するわけ

「私は班学習が嫌い。班学習をすると、私語が増えてうるさくなる。時間もかかるし」と言う人がいる。

班学習が「形骸化」して失敗するのは、決して子どもの責任ではない。教師の与える課題が、意見の拮抗を生み出すものになっていないのである。不思議だという思い、知りたいという願いをもつようなものになっていないのである。

課題だけではない。進め方にもルールがある。

課題を初めから班で話し合わせる人もあるようだが、これは明らかにルール違反である。

一人ひとりがしっかりと自分の意見をもたず、どうして話し合い学習ができればよいか。

高まりを生み出すには、順序があるはずだ。

まず、討論に耐えうる教材を用意し、次に生徒たちが思わず話したくなるように教師が仕掛け、自分の意見をしっかりと持たせた上で、話し合いの時間を与えるということである。最後に振り返り（気づき）の時間を設定することも忘れてはならない。

紀太氏が次のように述べている。

古い訳読式的な授業を一斉授業の形態で進めているときは、ひとつの学級でありながらまるで個別の学習がいつも静かに進行している場面を見かける。そこでは子どもたちの集団化への

要求もなく必要さえもないかに見えるが、それは教師が閉鎖的な古い授業方法によって、集団化への芽をつんでいるのであって決して子どもたち本来の姿ではない。むしろ子どもたちの中に自分の考えをもち「自分はこう思うが、友だちはどうとらえているのだろうか、どのように考えるのが正しいのだろうか」という話し合いをもちたい要求を作り出させるような授業の中味（授業のあり方と教材内容）が用意されなければならない。

もう一つ。現在の学校教育への警鐘となる文があるのでご紹介する。30年も前に書かれた文とは思えないほど、今の学校教育の盲点をついている。

学習集団づくりが単なるグループ学習でなく、集団づくりを通して学習の疎外を生む社会的必然に目を向けさせ、その正しい認識と批判の力をも育てていくためには、平行して学級集団・教師集団・父母集団（地域）へと広がりを持たねばならないし、教科内容や教材の科学性まできびしく問わねばならない。

紀太富士雄氏の論文は『新英語教育講座・15巻・学習集団づくり』（三友社出版）に紹介されている。

3. 自己責任が問われるとき

今、社会全体にモラルが喪失しているような気がしてならない。いろんなことが、個人単位で判断する場面がとて多くなっているようだ。道徳的な価値観が確立されているなら、それでも問題はないが、社会的に信じられるもの、拠り所となるものがなければ、判断の基準はすべて個人に委ねられる。

当然、「あれ？」と思う場面も出てくる。

例えば携帯電話がそうである。講演や映画館で突然呼び出しの音楽がなり、平気で話し出す若者。そこには自己責任などひとかけらも見られない。

家庭も大きく変わった。

中学校や高校の説明会でガムを噛んでいる親、教師が説明している時に隣の保護者とべちゃくちゃしゃべっている親、進路を決める三者面談でケンカを

始めののしりあう親子、いじめた子どもを家庭訪問するともっと大らかに見て欲しいと逆にクレームをつける親、万引きをした生徒を引き取りに行くと、後から悠然と姿を現し「金を払えばいいんでしょ？」と平然と言う親。この親の後ろに子どもがいる。親ができないことを子ができようか。友だちのような親子関係に、毅然とした躰が期待できようか。

社会が、学校が、ますます混沌としていく。何か歯止めがきかない状況に迷い込んだような錯覚さえ抱かせる。自己責任への無関心さが、このような修羅場を生み出しているように思えてならない。

4. 「集団」と「群れ」の違いは何か

集団になるか、群れになるかは、この自己責任をもたせられるかどうかで決まる。

例えば、生徒集会で、一人ひとりが意見を求められ、討論を深めるとき、意見の応酬で騒然となる。この場合、明らかに目的のある集団になっている。

ところが、集会で〇×クイズをすると、生徒たちは群れに変身する。きちんと整列した状態から解放されたたん、自由を自分勝手にはき違えてしまう。協力しようという気持ちが消え、多くの生徒が勝手にしゃべり、一部の生徒は隅に座って冷ややかに見る。「静かにしてください。」担当の生徒が絶叫する声がマイクを通してむなしく響く。

子どもは自分が発表する時や、自分に任された時に、必要感を感じて行動が自主的になる。それは自己責任を感じるからである。

自主的になった子どもたちの、何ものにも縛られない創造力、知的好奇心、あふれるエネルギーが学習を活性化させる。

教師はファシリテーター（進行役であり司会者）になればよい。その仕事は、生徒たちが自主的に学習に取り組み、自分で気づけるようにすることである。決して、自分が進めたい方向に無理強いする、用意したノルマを果たすことが仕事なのではない。

もっと、教師は「間違わせない」ことから「間違いを楽しむ」ことへと発想を転換すべきだろう。

間違いが認められ、一人ひとりの意見が大切にされ、感性と論理性が培われるような集団を育てたとき、同時にそこには自治力も育っている。

5. 生活班と学習班の違い

自己責任を果たす班の仕組みを考えてみよう。

よく、生活班をそのまま学習班にしている方を見かける。学習班と生活班では、明らかに集団的性格・活動目標・形態が違う。

学習班は、英語を通して人間形成をするために意図的に作られるものである。そこでは、対立的な見解やものの見方などのギャップが生まれる。当然話し合う回数も多くなる。話し合いを深めるには数が少ない方がよい。一つの班は、男女ペア混合で4人班とすべきだろう。

もし居心地のよい学習班にしたいなら、ソシオメトリーが利用できる。決して、くじなどで決めた班を学習班にしてはならない。

さて、学習班を育てるのに欠かせないことがある。

自己評価や相互評価を位置付けるということだ。人を評価するのは、自分を評価することにもなる。

そして班長会を組織し、互いに取り組みを評価し合う。班を評価し合うことで、集団が自治的になり、目的をもって熱心に取り組むようになる。

6. 学習集団が育つとき

集団が育たないクラスの特徴をあげよう。

- 学習規律がクラスの中にできていない。
- 教師の思いつきで授業が仕組まれている。
- テストなどの結果ばかりが大切にされ、過程が大切にされていない。
- すべて教師のペースで進められている。
- 小さなミスが見逃されていて、大きなミスをした時に叱られる。
- 教師の感情で授業が行なわれ、特定の生徒がひいきされている。
- 内容を詰め込みすぎている。
- 教科書の内容・文法中心。学びや「気づき」がない。
- 自己表現が単発で、やりっぱなし。など

一方、学習集団が自治的にぐんぐん伸びていくクラスでは、次のようなことが保障されている。

- comfortable な (間違いを認め合う) 集団。
- 関わりがあり、自ら学び、気づける集団。
- 違いを楽しもうという雰囲気がある集団。
- すべての活動が、見通しを持って仕組まれる。
- それぞれの活動がリンクされている。
- self-esteem が高まるような学習過程である。
- 教師が「できることより、変わることを大切」にしている。
- 教師がチャレンジしたくなるタスク (課題) を用意している。など

教育を彫刻にたとえるなら、集団を育てるのは、作品を仕上げるために外側を削るのではなく、むしろ石の内側に眠っているもの (石の素材のよさ) を生かすように削っていくようなものだろう。

7. みんなつながっている —

ONLY CONNECT

集団で学ぶという特性は、もっと学校で活かされなければならない。いくらみんなで学んでいても、管理されたり、指導もなく野放しの状態であったりしては、心がバラバラになってしまう。これでは、決して居心地はよくなる。

私たちは、自分一人で生きているのではない。みんなつながって社会ができている。関わりの大切さを教えることが学校教育。しかし、本来、時間をとって生徒同士を関わらせなければならないのに、現場ではむしろ時間短縮のために、簡単に使える教材 (ready to use) を求めている。

どの学習も、知識や内容を覚えるために、いろんな活動が方法として取り入れられる。しかし、それが目的ではなく、そこから何を感じたか、何がわかったか、自分はどう行動したか、他の友人たちとの関係はどうだったか、などを振り返ること、そしてそれを他者と共有することが大切だろう。

学ぶとはそういうものである。

集団で、学びのエネルギーをクロスさせれば、教師が考える以上の高まり・広まり・深まりが学習に生まれてくるだろう。学ぶ醍醐味はそこにある。

(なかしま・よういち 富山県砺波市立出町中学校)